

## いま、アンデスの地で「哲学の始まり」に立ち会う

中野裕考（お茶の水女子大学）

ラテンアメリカ哲学の展開を三つの時期に分けてみよう。第一期、植民地時代の修道院や大学における限られた層によるスコラ哲学の受容の後、第二期、19世紀～現在にかけての国民国家形成期には日本と同様、各国の大学制度の枠内でそのつど最新の西洋哲学が受容されてきた。この地に固有の哲学への志向やそれに対する批判がなされたり、解放の哲学や多文化主義といった特徴ある潮流が形成されたのもこの時期である。基本的にスペイン語やポルトガル語の話者が主体だったこの時期を経て、21世紀前半のいまもっとも注目されるのが、先住民の言語文化と哲学の接点である。折しも哲学が西洋外の異質な文化圏へと開いていこうとしているこの時期に、長らく学問芸術の主体とみなされてこなかった先住民が自らの言葉で思想表現を始めている。本提題では、ここに現在進行形の「哲学の始まり」を目撃できるのではないか、という仮説を提起してみたい。